幼児期以降の両親の夫婦関係と友人関係が青年期のパーソナリティに与える影響

古池若葉　中尾彩乃
（児童学科）　（生駒市保育士・幼稚園教諭）

本研究では，大学生を対象に質問紙調査を実施し，幼児期から青年期にかけての両親の夫婦関係，及び児童期から青年期にかけての友人関係が，青年期のパーソナリティにどのような影響を与えているかについて，パーソナリティの指標としてBig Five尺度を用いて検討した。その結果，幼児期の両親の夫婦関係の良好さは，子どもの調和性に影響しており，また，友人関係については，思春期の友人関係よりも児童期の友人関係の方が青年期の子どものパーソナリティに影響を与えていることが明らかになった。

キーワード：親の夫婦関係，友人関係，パーソナリティ形成，青年期

1．問題

幼少期は，生涯の人格形成の基礎が培われる重要な時期である。そのため，子どもの健全な発達において，子どもに日々関わる養育者間の夫婦関係は子どもを取り巻く最も身近な環境としてとりわけ重要である。数井・無藤・園田（1996）は夫婦関係に着目し，夫婦関係及び母子関係が子どもの発達にどのように影響するのかについて，①夫婦関係と子どもの発達状態，②子どもの心理発達と母親自身の心理状態，③社会的サポートと家族機能度のそれぞれの関連性について検討した。具体的には，48組の母親（28.3～43.1歳）と子ども（2.1～4.6歳）を対象に，家庭訪問による観察（子どもの愛着安定性を測定）と母親に対する質問紙調査（母親及び家族に関する項目）を行った。子どもの愛着安定性は，研究者が各家庭に出向いて母子の日常生活場面を1時間半から2時間ほど観察し，Attachment Qソート法で測定した。質問紙の内容は，次のとおりであった：日常生活のあり方からの夫婦関係を反映する尺度（MDAS），母子関係の母親側の心理状態を表す尺度（KGPSI），家族内外の対人関係から得られる情緒的なサポートを測定する尺度（ISSIQ），家族のダイナミクスを包括的に把握する尺度（家族アセスメントインベントリー）。その結果，夫婦関係の調和性が子どもの愛着の安定性と関連していることが明らかになった。また，母親が親として抱いている欲求不満や問題（親ストレス）などが，子どもの愛着の安定性を不安定化していた。夫婦関係と母親の親ストレスの関連について分析すると，夫婦関係の調和性と母親の親ストレスは有意に関連しており，夫婦関係が良好でない場合，母親の親ストレスが高くなり，子どもの愛着の安定性が低くなることが明らかになった。以上の結果は，夫婦関係の調和性が母親の親ストレスを介して子どもの愛着の安定性に影響することを示しているが，日常生活における夫婦関係の不良自体は，直接的にどのような影響を子どもにもたらすのだろうか。

中村（2017）は，Wai-Yung Leeの研究を紹介している。Leeは，両親の葛藤場面における子どもの生理的変化について実験的に検討して

いる。具体的には，6 ～ 15 歳までの子どもがいる夫婦で，子どもの行動や感情に関して心配事があり，親子とも研究に参加する意欲がある家族 20 組を対象に，両親に子どもの目の前で話し合うように求め，両親の葛藤場面に曝されている子どもの生理的反応を記録した。生理的反応の指標は，皮膚コンダクタンス反応（皮膚を流れる電流の抵抗が皮膚の湿気で低くなる反応）と心拍反応であった。また，両親の話し合いの内容は，夫婦で意見が一致していない事柄や子どもの問題（言うことを聞かない･不登校･摂食障害・家出など）についてであった。最初の 10 分間で子どもの生理的反応のベースラインを計測し，次に 30 分間の両親の葛藤場面に曝されている間の子どもの覚醒状態を計測した。その結果，合計 600 分間（20 ケース × 30 分間）の話し合いのうち 426 分間で覚醒状態が見られ，両親の話し合いの 70％以上で子どもの覚醒状態が生じていたことが示された。また，研究に参加した子ども全員が両親の緊迫した関係に覚醒状態を示していた。以上の結果は，両親の葛藤場面に曝されると，子どもは情緒的に影響を受けることを明らかにしているが，両親の緊迫した関係に曝される経験が積み重なると，子どもにどのような心理的影響が生じるのだろうか。

小泉・北村・瀬地山・菅原・菅原・詫摩・八木下（2002）は，母親の妊娠・出産・子育てに関する著者らの縦断研究に登録されていた出産後 11 年目の子ども（9 ～ 11 歳）とその母親（29 ～ 53 歳）及び父親 (31 ～ 60 歳) を対象に，追跡調査として質問紙調査を行い，夫婦間の愛情関係と児童期の子どもの抑うつ傾向の関連について検討した。質問紙の内容は次のとおりであった：母親・父親を対象とする，夫婦間の愛情を測定する尺度（Marital Love 尺度）と子どもに対する養育態度を測定する尺度（養育の暖かさ尺度・過干渉傾向尺度），母親・父親・子どもを対象とする，家族機能を測定する尺度（家族の雰囲気尺度，FACES － Ⅲ），子どもを対象とする，子どもの抑うつ傾向を測定する尺度（CDSS の日本語版）。その結果，父親・母親ともに夫婦間の愛情度が低い夫婦の方が，ともに愛情度が高い夫婦よりも子どもの抑うつ傾向が高いことが明らかにされた。子どもが回答した家庭の雰囲気得点では，愛情度が低い夫婦の場合に子どもが家庭の雰囲気について「冷たく居心地の悪いもの」と感じていることが分かり，家庭の雰囲気と子どもの抑うつ傾向に強い関連があることが明らかになった。逆に言えば，この結果は，夫婦の愛情度が高く，また家庭の雰囲気が暖かく居心地の良いものであると，子どもの抑うつ傾向が低くなることを示している。

以上で概観した一連の先行研究により，日常生活における夫婦関係の良し悪しは子どもの生理的な反応に影響し，その経験の積み重ねを通して，子どもの愛着の安定性や抑うつ傾向への影響をもたらすことが分かった。それでは，愛着や抑うつ傾向だけでなく，子どものパーソナリティ全般に対して，親の養育態度や両親の夫婦関係等はどのような影響を与えているのだろうか。

藤井・井上・奥平（1987）は，小・中学生の子どもを持つ母親 427 名を対象に質問紙調査を行い，両親の養育態度と母親自身の生活価値観･子育て観との関連，及び両親の養育態度と母親からみた子どもの性格特徴との関連について検討した。質問紙の内容は次のとおりである：地域と家庭状況，母親の生活価値観，母親の子育て観，両親の養育態度，母親から認知された子どもの性格特徴。質問紙調査の回答から養育態度を因子分析した結果，「干渉的態度」（指図・世話･不安･聞きたがるなど），「拒否･厳格」（欠点を言う・他と比較・禁止・体罰など），「無関心・放任」（話し合わずに決める・約束を忘れるなど），「保護・溺愛」（淋しい・かばうなど），「父母不一致」（両親の子育てに関する意見が合わない・子に愚痴を言うなど）の 5 因子が抽出された。また，子どもの性格特徴を因子分析した結果，「自我」（自分で考え決めて行動・表現するなど意欲・持続・努力する自我機能に関する因子），「幼児性･自己中心性」（すぐふくれる･わがままなど）「神経質･不安」（気にしやすい･習癖など不安が強い）「非協調性」（友達関係や

協調ができないなど),「内気」(新しい環境になじめない・見栄っ張りでない),「情緒・共感性が乏しい」(思いやりがない・情が細やかでない)の6因子が抽出された。子どもの性格特徴と家庭状況・養育態度の関連について分析すると,子どもの自我と両親の拒否・厳格,及び無関心・放任な養育態度との相関が最も高かった。また,子どもの幼児性・自己中心性と両親の拒否・厳格,干渉的態度,及び父母不一致との相関も高かった。子どもの神経質・不安と関連するのは干渉的･不安の強い養育態度のほか,要求を無視しやすい態度であった。協調性・社会性の乏しい性格特徴は,父母不一致と相関しており,家庭の人間関係のあり方が子どもの社会性の発達と関連していることが分かった。以上より藤井らは,親が子どもに暖かい関心を寄せながら子の自立・自律を促進する態度や,家庭の統合性が子どもの性格形成の重要な条件であると考察している。これらの結果から,両親の夫婦関係は,子どものパーソナリティの協調性や社会性という面にも影響をもたらすことが分かった。

以上の諸研究は,子どもに日々関わる養育者間の夫婦関係が,子どもの愛着の安定性,抑うつ傾向,パーソナリティにおける協調性や社会性に影響することを示していた。しかしながら,それぞれの先行研究においては,夫婦関係の指標が限定的であった。具体的には,Lee は子育てに関する夫婦間での意見の不一致や子どもの問題についての葛藤,藤井らは子育てに関する夫婦間での意見の不一致について捉えていた。また,数井らは母親の回答において,育児とは直接関連しない日常生活上の諸領域で,夫との間でどのくらい協調的に生活が送れているか,夫をパートナーとしてどの程度信頼し,認めているのかについて,行動面に注目して捉えていた。一方,小泉らは,夫婦間の恋愛感情を含む愛情関係といった,感情面に注目して捉えていた。子どもと生活を共にする両親の夫婦関係が子どものパーソナリティ形成にどのような影響をもたらすかを検討するためには,より多面的に夫婦関係を捉える必要があるだろう。また,上記の指標は,当事者である親に夫婦関係を尋ねるものであり,両親の関係性に関する子ども自身の認識を問うものではなかった。しかし,子どものパーソナリティ形成により重要な影響を与えるのは,子ども自身が両親の夫婦関係をどのように捉えているかということであろう。そのためには,夫婦関係の中でも子どもから認知されやすい面に焦点を当てて子どもの認識を捉える必要があるだろう。

次に,先行研究では,両親の夫婦関係の影響を受ける子ども側の指標として,社会情緒的な指標のみを用いたものが多く,パーソナリティ全般への影響を検討したものは少なかった。具体的には,子どもの健全な発達に関する指標として,数井らは母親に対する愛着安定性を,Lee と小泉らは,子どもの抑うつを取り上げていた。一方,藤井らは子どものパーソナリティについて多面的に捉えていた。ただし,藤井らの研究においては,子どものパーソナリティに関する質問紙の回答を母親に求めており,実際の子どものパーソナリティとはずれがあることが考えられる。そのため,子どものパーソナリティについては,小泉らが実施しているように,パーソナリティを多面的に捉える質問紙調査を実施し,子ども自身に回答を求めることが望ましいと考えられる。

さらに,上記の先行研究では,子どものパーソナリティに影響を与える要因として,夫婦関係以外の関係性については取り上げられていなかった。しかし,例えば両親の夫婦関係が不良な場合には,子どものパーソナリティにネガティブな影響が及ぶと考えられるが,子どもが他の人間関係において良好な関係を経験していれば,子どものパーソナリティにおけるネガティブな影響は緩和される可能性があるだろう。また,両親の夫婦関係と他の人間関係を比較することで,それぞれが子どものパーソナリティ形成に与える影響の特徴を明確にできることが期待される。両親の夫婦関係以外に,子どものパーソナリティ形成に重要な影響を与える人間関係としては,子どもにとって最も身近な存在である友人関係が想定される。友人は,集

団生活の中で，人間関係を築いていく方法を学ぶ身近な存在であり，とりわけ子どもが親離れをしながらアイデンティティを形成していく上で，同年代の友人に受け入れられる安心感は，子どものパーソナリティ形成において重要な影響を与えることが推測される。

以上を踏まえて，本研究では，子どもから認知された多面的な夫婦関係の観点から，夫婦関係の良好さが子どものパーソナリティの諸側面にどのように影響しているのかについて，友人関係が子どものパーソナリティに与える影響と対比しながら検証することを目的とする。

なお，夫婦関係は，子育てをする中で変化しうると考えられるため，子どもの人生のどの時期であるかによって，両親の夫婦関係が子どものパーソナリティに与える影響は異なると考えられる。また，同様に，子どもの人生のどの時期の友人関係であるかによって，子どものパーソナリティに与える影響は異なるであろう。そこで，本研究では，夫婦関係については幼児期・児童期・思春期，友人関係については児童期・思春期に分けて各時期の関係性について回答を求めることにする。具体的には，青年期に当たる大学生を対象に，幼児期・児童期・思春期の両親の夫婦関係，児童期・思春期の自身の友人関係についてそれぞれ回想してもらい，幼児期以降の夫婦関係と児童期以降の自身の友人関係，及び現在の自身のパーソナリティについて回答を求める。友人関係について児童期以降を取り上げるのは，友人関係の影響が大きくなるのは，長時間の学校生活を経験する就学後と考えられるからである。また，夫婦関係は，一定の時間的な連続性を保ちつつも，子どもの成長に伴い変化することが予想される。そこで，夫婦関係の連続性についても合わせて検討する。なお，パーソナリティについては，多面的に捉えるためにBig Five尺度を用いる。

本研究における仮説は，以下のとおりである。

仮説１　思春期までの両親の夫婦関係の状態は，青年期の子どもの外向性･情緒不安定性･開放性・誠実性・調和性のいずれかに影響を与えている。

仮説２　思春期までの友人関係の状態は，青年期の外向性・情緒不安定性・開放性・誠実性・調和性のいずれかに影響を与えている。

仮説３　子どもの幼児期，児童期，思春期に認知された両親の夫婦関係の状態には，連続性がある。

２．方法

調査対象　18～22歳の大学生201名を対象に，無記名で質問紙調査を実施した。得られた回答のうち，無効回答を除いたところ，191名が分析対象となった。思春期の夫婦関係においては，両親の離別や死別などの理由から回答していない対象者4名を除いた187名を分析対象とした。なお，性別の回答を求めなかったため男女比は不明だが，調査対象者のほとんどが女子であった。

調査期間　2021年　11月

調査方法　紙媒体及びGoogleフォームを使用した無記名の質問紙法を行った。紙媒体を使用した質問紙調査においては，調査協力者が出席している講義中に調査時間を設け，質問紙を配布し，記入後にその場で回収した。Googleフォームを使用した質問紙調査においては，回答ページにつながるURLを調査協力者に送信し，調査協力者から記入済みの回答を送信してもらうことで回収した。なお，どちらの方法においても，回収した内容は本研究以外には利用しないことを，質問紙の冒頭に記載する形で約束し，倫理的な配慮を行った。

調査内容　質問紙は以下の項目からなる。

①対象者の回生と年齢

②幼児期･児童期･思春期の子どもから見た「夫婦関係」：諸井（1996）の夫婦関係満足尺度の6項目を改変して用いた。原版は実際の夫婦関係の回答を当事者に求めるものだが，本研究では，対象者に幼児期・児童期・思春期のそれぞれにおける両親の夫婦関係について回想してもらい，回答を求めた。各項目の文は，過去の両親の夫婦関係について尋ねているため，過去形に修正した。選択肢は，「ほ

とんどあてはまらない（1 点）」～「かなりあてはまる (4 点)」の 4 件法を用いた。

③児童期・思春期の自身の「友人関係」: 丹野（2008）の改訂版友人関係機能尺度を使用し，児童期・思春期のそれぞれの時期で最も親しくしていた友人との関係性について回想してもらい，回答を求めた。45 項目と項目数が多く，児童期・思春期のそれぞれの時期について質問するには回答者の負担が大きいと考えたため，友人との関係性を尋ねる上で重要であると考えられる 7 つの下位尺度(安心さ・気楽さ，関係継続展望，情緒的結びつき，相談・自己開示，支援性，肯定・受容，人生の重要な意味）の計 35 項目を抜粋して使用した。各項目の文章においては，過去の自身の友人関係について尋ねているため，それぞれ過去形に修正した。選択肢は，「あてはまらない（1 点)」～「あてはまる（5 点)」の 5 件法を用いた。

④現在の自身の「パーソナリティ」: Big Five 尺度は，60 項目と項目数が多く，回答者の負担になることが懸念されたため，本研究では，熊谷・並川・中根・野口・谷・脇田（2012）の Big Five 尺度短縮版の 29 項目を使用し，現在の自身のパーソナリティについて回答を求めた。選択肢においては，「全くあてはまらない (1 点)」～「非常にあてはまる (5 点)」の 5 件法を用いた。

3．結果と考察

3.1　尺度に関する検討

3.1.1　幼児期・児童期・思春期の子どもから見た夫婦関係に関する尺度

幼児期・児童期・思春期の時期ごとに，夫婦関係に関する 6 項目に対して，重みづけのない最小二乗法による因子分析を行い，因子負荷量が .40 以上の項目を採用した。その結果，いずれの時期においても同一の 1 因子のみが抽出された。そこで, 3 つの時期の各 6 項目の回答データを合わせた全回答データを対象に，再度，夫婦関係を問う 6 項目に対して同一の因子分析を行い，幼児期・児童期・思春期に共通する 1 因子を抽出した（Table 1)。第 1 因子は，夫婦としての仲の良さなどの項目によって構成されているため,「夫婦関係の良好さ」因子と命名した。α 係数は .97 であり，信頼性は十分であったため，加算平均を尺度得点とした。

Table 1　幼児期・児童期・思春期の子どもから見た夫婦関係に関する項目の因子分析結果（重みづけのない最小二乗法）

項目	F1
F1 夫婦関係の良好さ（α=.97）	
4. 2 人の関係によって，父親と母親はそれぞれ幸福であった	.95
6. 2 人の関係のあらゆるものを思い浮かべると，父親と母親は幸福な夫婦であった	.93
2. 父親と母親の夫婦関係は，非常に安定していた	.93
3. 父親と母親との関係は，強固であった	.90
1. 父親と母親は申し分のない結婚生活を送っていた	.88
5. 父親と母親は，まるで同じチームの一員のようであった	.87

3.1.2　児童期・思春期の友人関係に関する尺度

児童期の友人との関係性と思春期の友人との関係性を比較するためには，両者に共通する因子を抽出する必要がある。そこで,「児童期の友人関係」を問う項目と「思春期の友人関係」を問う項目のそれぞれ 35 項目の回答データを合わせた全回答データを対象に，友人関係を問う 35 項目に対して，主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が .35 以上の項目を採用し，どの因子にも .35 以上の負荷を示さない項目と複数の因子に .35 以上の負荷を示す 11 項目を削除した。残りの 24 項目に対して再度因子分析を行った結果，3 因子が抽出された。

第 1 因子（9 項目）は,「A さんとは，気楽につきあえた」や「A さんと一緒にいると，なんとなく楽だった」などの項目での負荷が高かったため,「気楽・受容」因子と命名した。第 2 因子（10 項目）は,「A さんは，自分に悩みを打ち明けてくれた」や「A さんは，よい相談相手であった」などの項目での負荷が高かったため,「信頼感」因子と命名した。第 3 因子

Table 2　児童期・思春期の友人関係に関する項目の因子分析結果（重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3
F1 気楽・受容（α=.95）			
14. Aさんとは，気楽につきあえた	**1.05**	-.06	-.13
1. Aさんと一緒にいると，なんとなく楽だった	**.93**	-.05	-.11
8. Aさんとは，自然に一緒にいられた	**.92**	-.12	.08
22. Aさんとの関係は，とても心地よかった	**.86**	-.04	.06
6. Aさんは，自分の存在を受入れてくれた	**.73**	.26	-.10
29. Aさんとの関係は，とても安心した	**.72**	.06	.10
34. Aさんは，自分を大切にしてくれていると思った	**.51**	.33	.07
3. Aさんとは，絆のようなものを感じた	**.43**	.18	.24
27. Aさんは，私に居場所を作ってくれた	**.43**	.16	.21
F2 信頼感（α=.95）			
11. Aさんは，自分に悩みを打ち明けてくれた	-.06	**1.01**	-.19
4. Aさんは，よい相談相手であった	.02	**.92**	-.08
17. Aさんとは，つらいときに励まし合う仲であった	-.06	**.84**	.04
25. Aさんとは，他の人にはできないような真剣な話をすることもできた	-.17	**.79**	.22
5. Aさんはいざというとき，力になってくれた	.15	**.74**	-.02
32. Aさんには，何でも話せた	.08	**.64**	.12
12. Aさんは，頼れる存在であった	.16	**.63**	.03
31. Aさんがつらいと，自分もつらく感じた	.02	**.61**	.19
26. Aさんは，ふだんから私を助けてくれた	.15	**.55**	.21
33. Aさんとは，本当に困ったときに助け合うと思っていた	.26	**.43**	.26
F3 人生の重要な意味（α=.90）			
21. Aさんと出会ったことで，自分の人生は変わったと思った	-.14	-.03	**.93**
28. Aさんとの関係がなければ，今の（当時の）自分はいないと思っていた	-.01	.00	**.84**
15. Aさんは，自分の人生を語る上で欠かせない存在であった	.03	.07	**.76**
7. Aさんと過ごした時間は，今後の自分の人生でも重要な意味を持つと思った	.13	-.03	**.75**
9. Aさんとの関係は，何があっても切れないと思っていた	.32	.14	**.38**
因子間相関　F1		.75	.73
因子間相関　F2			.78

（5項目）は，「Aさんと出会ったことで，自分の人生は変わったと思った」や「Aさんとの関係がなければ，今の（当時の）自分はいないと思っていた」などの項目での負荷が高かったため，「人生の重要な意味」因子と命名した。

以上の3因子に対して信頼性分析を行った。各因子に対応する3つの下位尺度のα係数は，第1因子から順に.95，.95，.90であり，信頼性は十分であったため，それぞれの項目の加算平均を下位尺度得点とした（Table 2）。

3.1.3　子どものパーソナリティに関する尺度

パーソナリティに関する29項目に対して，重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40以上の項を採用し，どの因子にも.40以上の負荷を示さない項目と複数の因子に.35以上の負荷を示す項目を削除した。3項目を削除し，残りの26項目に対して再度因子分析を行った結果，5因子が抽出された。

第1因子（5項目）は，「社交的」「外向的」などの項目での負荷が高かったため，「外向性」因子とした。第2因子（5項目）は，「不安になりやすい」や「弱気になる」などの項目での負荷が高かったため，「情緒不安定性」因子とした。第3因子（6項目）は，逆転項目の「いい加減な」や逆転項目の「怠惰な」などの項目での負荷が高かったため，「誠実性」因子とした。第4因子（6項目）は，「多才の」や「好奇心が強い」などの項目での負荷が高かったため，「開放性」因子とした。第5因子（4項目）は，逆転項目の「怒りっぽい」や逆転項目の「短気」などの項目での負荷が高かったため，「調和性」因子とした。

逆転項目の得点を逆転した後，5因子の信頼性分析を行った。各因子に対応する5つの下位尺度のα係数は，第1因子から順に，.85，.83，.81，.72，.74であり，信頼性は

Table3　青年期のパーソナリティに関する項目の因子分析結果（重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4	F5
F1 外向性（α=.85）					
21. 社交的	**.86**	.00	-.08	.01	-.05
15. 外向的	**75**	-.03	-.07	.07	.04
10. 陽気な	**.74**	.05	.10	-.03	-.11
5. 無口な ●	**-.68**	.11	.03	.12	-.10
1. 話し好き	**.66**	.08	.05	.02	.17
F2 情緒不安定性（α=.83）					
6. 不安になりやすい	.02	**.88**	-.01	-.04	.00
18. 弱気になる	.07	**.84**	.05	-.14	-.12
11. 心配性	.10	**.76**	-.14	.02	-.04
28. 緊張しやすい	-.12	**.59**	-.06	.09	-.06
26. 憂鬱な	-.17	**.52**	.11	-.03	.14
F3 誠実性（α=.81）					
3. いい加減な ●	-.08	-.02	**.79**	.03	-.03
13. 怠惰な ●	-.20	.09	**.77**	.14	.11
16. 成り行きまかせ ●	.21	-.12	**.64**	-.12	-.13
8. ルーズな ●	.04	.01	**.63**	.11	-.04
23. 軽率な ●	.02	.01	**.58**	.04	.13
25. 几帳面な	-.13	.20	**-.41**	.28	.03
F4 開放性（α=.72）					
7. 多才の	.00	-.02	-.01	**.66**	.01
29. 好奇心が強い	.15	.00	.03	**.57**	-.09
22. 頭の回転の速い	-.22	-.04	.06	**.56**	.07
12. 進歩的	.09	-.08	-.29	**.50**	.08
24. 興味の広い	.23	-.04	.11	**.50**	-.06
2. 独創的な	.04	.00	.12	**.41**	-.05
F5 調和性（α=.74）					
14. 怒りっぽい ●	.14	.09	.04	.07	**.79**
9. 短気 ●	.15	.12	.15	.01	**.75**
4. 温和な	.08	.26	.03	-.03	**-.61**
17. 寛大な	.08	.07	.17	.25	**-.50**
因子間相関 F1		-06	.15	.50	-.11
F2			-.13	.00	.31
F3				-.08	.18
F4					-.20

注）逆転項目は「●」で示した。

Table4　各尺度の平均値・標準偏差と相関係数（N＝191）

	M(SD)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1.夫婦（幼）	3.13 (.76)	**.81** **	**.65** **	.14	.14	.04	.02	-.01	-.02	.06	-.12	.08	.04	.13
2.夫婦（児）	3.00 (.83)		**.81** **	.08	.09	.04	.05	.00	-.02	. 09	-.07	.03	.03	.04
3.夫婦（思）	2.89 (.97)			.12	.13	.08	.08	.06	.04	**.16** *	-.08	-.03	.05	-.02
4. 友人・気楽（児）	4.30 (.68)				**.78** **	**.71** **	**.55** **	**.51** **	**.42** **	**.25** **	-.10	.12	**.20** **	**.17** *
5. 友人・信頼（児）	3.96 (.82)					**.76** **	**.45** **	**.58** **	**.47** **	**.29** **	.03	**.19** *	**.16** *	.13
6. 友人・人生（児）	3.77 (.90)						**.36** **	**.45** **	**.39** **	**.27** **	.04	**.16** *	**.16** *	.10
7. 友人・気楽（思）	4.54 (.60)							**.82** **	**.81** **	.14	.00	.08	-.01	.09
8. 友人・信頼（思）	4.39 (.66)								**.77** **	**.20** **	.12	.08	.02	.06
9. 友人・人生（思）	4.33 (.71)									.14	.12	.12	.01	.08
10. 外向性	3.48 (.82)										-.08	-.14	**.44** **	.02
11. 情緒不安定性	3.66 (.80)											**.17** *	-.08	**-.24** **
12. 誠実性	2.75 (.78)												.03	**.16** *
13. 開放性	3.16 (.62)													**.17** *
14. 調和性	3.58 (.72)													

注）項目 1~3：両親の夫婦関係の良好さ，4～9：友人関係（気楽：気楽・受容，信頼：信頼感，人生：人生の重要な意味），10～14：青年期のパーソナリティ，幼：幼児期，児：児童期，思：思春期を示す。有意な相関は太字で示した。　** p<.01, * p<.05

概ね十分であったため，それぞれの項目の加算平均を下位尺度得点とした（Table 3）。

幼児期～思春期の両親の夫婦関係，友人関係，青年期のパーソナリティの各尺度の平均値と標準偏差及び尺度間の相関係数を Table 4 に示す。

3.2 夫婦関係と子どものパーソナリティに関する単回帰分析

幼児期・児童期・思春期における両親の夫婦関係の良好さが青年期の子どものパーソナリティにどのような影響を与えているのかについて明らかにするために重回帰分析を行ったところ，多重共線性が生じたため，単回帰分析を行った。幼児期･児童期･思春期の各時期の「夫婦関係の良好さ」を独立変数，子どものパーソナリティにおける 5 つの下位尺度を従属変数として，それぞれ強制投入法による単回帰分析を行った。その結果，幼児期の「夫婦関係の良好さ」は，「調和性」（β = .13，p < .10）にのみ有意傾向の正の影響を与えていた。ただし，説明率は極めて小さく，有意ではなかった（R^2=.02）。また，児童期と思春期の「夫婦関係の良好さ」については，青年期のパーソナリティへの有意な影響は，いずれの下位尺度に対しても認められなかった。

3.3 友人関係と子どものパーソナリティに関する単回帰分析及び重回帰分析

児童期・思春期の友人関係が青年期の子どものパーソナリティにどのように影響しているのかを明らかにするため，児童期・思春期の友人関係に関する 3 つの下位尺度（それぞれの時期の「気楽・受容」「信頼」「人生の重要な意味」）を独立変数，青年期のパーソナリティに関する 5 つの下位尺度を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果，多重共線性が認められたことから，多重共線性にかかわっていると考えられる変数については単回帰分析を，そうでない一部の変数（児童期・思春期の「人生の重要な意味」）については重回帰分析を行った。

児童期の友人関係の「気楽・受容」「信頼感」を独立変数，青年期のパーソナリティにおける 5 つの下位尺度を従属変数として，それぞれ強制投入法による単回帰分析を行った。その結果，友人関係の「気楽・受容」は，「外向性」，「開放性」，「調和性」に有意な正の影響を与えていた（順に β = .25，p < .01；β = .20，p < .01；β = .17，p < .05）。ただし，いずれも説明率は極めて小さく，有意ではなかった（順に R^2=.06；R^2=.04；R^2=.03）。また，友人関係の「信頼感」は，「外向性」，「誠実性」，「開放性」に有意な正の影響を，「調和性」には有意傾向の正の影響を与えていた（順に β = . 29, p < .01；β = .19，p < .01；β = .16，p < .05；β = .13，p < .10）。ただし，いずれの変数も説明率は極めて小さく，有意ではなかった（順に R^2=.09；R^2=.03；R^2=.03；R^2=.02）。

思春期の友人関係についても「気楽･受容」「信頼感」を独立変数，青年期のパーソナリティにおける 5 つの下位尺度を従属変数として，それぞれ強制投入法による単回帰分析を行った。その結果，友人関係の「気楽･受容」は，「外向性」（β = .14，p < .10）のみに有意傾向の正の影響を与えていた。ただし，説明率は極めて小さく，有意ではなかった（R^2=.02）また，友人関係の「信頼感」は，「外向性」（β = .20，p < .01）のみに有意な正の影響を与えていた。ただし，説明率は極めて小さく，有意ではなかった（R^2=.04）

次に，児童期と思春期のそれぞれの「人生の重要な意味」を独立変数，青年期のパーソナリティにおける 5 つの下位尺度を従属変数として，強制投入法による重回帰分析を行った。その結果，児童期の友人関係の「人生の重要な意味」は，「外向性」，「開放性」に有意な正の影響を，「誠実性」に有意傾向の正の影響を与えていた（順に β = .26, p < .01；β = .18, p < .05；β = .13，p < .10）。ただし，いずれも説明率は極めて小さく，有意ではなかった（児童期と思春期の 2 変数による説明率は，順に R^2 = .08；R^2 = .03；R^2 = .03）。なお，思春期の「人生の重要な意味」については，青年期のパーソナリティにおける 5 つの下位尺度に対する有意な影響は認められなかった。

Table5　幼児期～思春期の夫婦関係，友人関係が青年期のパーソナリティに与える影響の様相

		青年期のパーソナリティ				
		外向性	情緒不安定性	誠実性	開放性	調和性
両親の夫婦関係の良好さ（幼児期）		－	－	－	－	†
〃　〃　〃（児童期）		－	－	－	－	－
〃　〃　〃（思春期）		－	－	－	－	－
友人関係（児童期）	気楽・受容	＊＊	－	－	＊＊	＊
	信頼感	＊＊	－	＊＊	＊	†
	人生の重要な意味	＊＊	－	†	＊	－
友人関係（思春期）	気楽・受容	†	－	－	－	－
	信頼感	＊＊	－	－	－	－
	人生の重要な意味	－	－	－	－	－

注）いずれも正の影響を示している。表中の記号は，以下の水準で有意な（有意傾向の）影響が認められたことを意味する。＊＊：1％水準，　＊：5％水準　†：有意傾向。

Table 6　児童期の夫婦関係の良好さにおける幼児期の夫婦関係の影響の単回帰分析の結果

項目	夫婦関係の良好さ（児童期） β
夫婦関係の良好さ（幼児期）	.81**
R^2	.66**

** $p<.01$

Table 7　思春期の夫婦関係の良好さにおける児童期の夫婦関係の影響の単回帰分析の結果

項目	夫婦関係の良好さ（思春期） β
夫婦関係の良好さ（児童期）	.81**
R^2	.65**

** $p<.01$

Table 8　思春期の夫婦関係の良好さにおける幼児期の夫婦関係の影響の単回帰分析の結果

項目	夫婦関係の良好さ（思春期） β
夫婦関係の良好さ（幼児期）	.65**
R^2	.43**

** $p<.01$

以上の分析結果に基づき，幼児期から思春期までの両親の夫婦関係と友人関係が青年期のパーソナリティに与える影響の様相を Table 5 に整理した。Table 5 より，両親の夫婦関係の良好さについては，幼児期の夫婦関係が青年期の子どもの調和性に有意傾向の影響を与えているのみで，児童期と思春期の夫婦関係の影響は認められなかった。それに対して，友人関係については，児童期の友人関係が，「情緒不安定」を除くすべての面で青年期のパーソナリティに有意または有意傾向の影響を与えていた。また，児童期の友人関係の「気楽･受容」「信頼感」「人生の重要な意味」の全てが，青年期のパーソナリティの「外向性」と「開放性」に有意な影響を与えており，「誠実性」と「調和性」にも，友人関係のいずれか２つの面が有意に影響していた。一方，思春期の友人関係については，「気楽・受容」と「信頼感」が青年期の「外向性」に有意または有意傾向の影響を与えているのみであった。思春期に比べて，児童期の方が，青年期のパーソナリティに多面的な影響を与えていることが明らかになった。また，青年期のパーソナリティの中でも，「外向性」に，児童期や思春期の友人関係の多様な面が影響していることが分かった。

3.4　子どもに認知された幼児期・児童期・思春期の夫婦関係の連続性と変化に関する単回帰分析と対応ある分散分析

両親の夫婦関係は，子どもの成長に伴い変化する可能性がある。それは，例えば子どもの幼児期における夫婦関係のあり方が土台となり児童期の夫婦関係を形成する，というように，前の時期の夫婦関係は，その後の夫婦関係の形成に影響するであろう。そこで，幼児期･児童期･思春期の子どもに認知された夫婦関係の良好さの間にどのような影響関係があるのかを明らか

にするため，それぞれを独立変数と従属変数とする単回帰分析を行った（Table 6 ～ 8）。まず，幼児期の「夫婦関係の良好さ」を独立変数，児童期の「夫婦関係の良好さ」を従属変数として，強制投入法による単回帰分析を行った。その結果,「幼児期の夫婦関係」は「児童期の夫婦関係」に有意な正の強い影響を与えていた（β = .81, p < .01）。次に，児童期の「夫婦関係の良好さ」を独立変数，思春期の「夫婦関係の良好さ」を従属変数として，強制投入法による単回帰分析を行った。その結果，児童期の「夫婦関係の良好さ」は思春期の「夫婦関係の良好さ」に有意な正の強い影響を与えていた（β = .81，p < .01）。さらに, 幼児期の「夫婦関係の良好さ」を独立変数，思春期の「夫婦関係の良好さ」を従属変数として，強制投入法による単回帰分析を行った。その結果，幼児期の「夫婦関係の良好さ」は思春期の「夫婦関係の良好さ」にも有意な正のやや強い影響を与えていた（β = .65, p < .01）。ただし，その影響の程度は，児童期の夫婦関係が思春期の夫婦関係に与える影響（β = .81）よりも弱かった。

以上より，両親の夫婦関係の良好さは，子どもの幼児期における夫婦関係が児童期の夫婦関係に大きく影響し，また，児童期の夫婦関係が思春期の夫婦関係に同程度に大きく影響することが示された。ある時期の夫婦関係が良好であるほど，それに続く時期の夫婦関係がより良好であった。このように，夫婦関係はあるレベルの良好さを保ちながら推移する一方，幼児期と思春期のように時間的に離れるほど，徐々に変化していくことが示唆された。夫婦関係の良好さに関する Table 4 の平均値は，時期の経過に伴い低下している。そこで，夫婦関係の良好さの尺度得点について，時期を独立変数とする対応のある分散分析を行った。その結果，時期の主効果が認められた（F (2, 380) =13.53, p < .001）。Bonferroni 法による多重比較の結果，幼児期と児童期，及び幼児期と思春期の間に 1%水準の，また，児童期と思春期の間に 5%水準の有意差があり，幼児期よりも児童期の方が，また，児童期よりも思春期の方が両親の夫婦関係が相対的に不良であった。

本項における分析結果から，子どもに認知された両親の夫婦関係の良好さは，ある時期に良好であるほど次の時期にも良好であるという形で連続性を持ちつつも，一般的な傾向として，幼児期の夫婦関係が最も良好であり，時期を経るにつれて徐々に良好さが低下していくという経過をたどることが示唆された。

4. 全体的考察

本研究では，大学生を対象とする質問紙調査により，幼児期から思春期のそれぞれの時期に子どもから認知された両親の夫婦関係の良好さが，青年期の子どものパーソナリティの諸側面にどのように影響しているのかについて，友人関係の影響と対比しながら検討した。その結果，夫婦関係・友人関係ともにパーソナリティへの影響が認められたが，いずれの時期のどの関係性についても，青年期の子どものパーソナリティへの影響を説明するには，説明率が低かった。そのことを前提としつつ，以下では，本研究の結果について考察する。

4.1 仮説 1「思春期までの両親の夫婦関係の状態は，青年期の子どもの外向性・情緒不安定性・開放性・誠実性・調和性のいずれかに影響を与えている」の検討

子どもに認知された夫婦関係の状態が，青年期の子どものパーソナリティに影響を与えているのかについて明らかにするために，単回帰分析を行った。その結果，児童期と思春期の「夫婦関係の良好さ」については，青年期のパーソナリティに対する有意な影響が認められなかったが，幼児期の「夫婦関係の良好さ」は，青年期の「調和性」にのみ有意傾向の正の影響を与えていた。このことから，幼児期の両親の夫婦関係が良好であると，青年期の調和性が高まる傾向にあることが明らかになった。したがって，仮説 1 は「調和性」の面で支持された。藤井ら（1987）の研究において，子育てに関する意見の不一致がある夫婦の場合，子どもの幼児性・自己中心性や非協調性に影響することが明らか

にされている。本研究における子どもに認知された「夫婦関係の良好さ」と青年期の「調和性」との関連についての結果は，藤井らの研究結果と符合する。

4.2　仮説２「思春期までの友人関係の状態は，青年期の外向性・情緒不安定性・開放性・誠実性・調和性のいずれかに影響を与えている」の検討

友人関係の状態が，青年期のパーソナリティに影響を与えているのかについて検討するために，重回帰分析または単回帰分析を行った。その結果，児童期の友人関係において，「気楽・受容」は，青年期の「外向性」「開放性」「調和性」に有意な影響を与えていた。「信頼感」は，「外向性」「誠実性」「開放性」に有意な影響を，「調和性」には有意傾向の影響を与えていた。「人生の重要な意味」は，「外向性」「開放性」に有意な影響を，「誠実性」に有意傾向の影響を与えていた。一方，思春期の友人関係においては，「気楽・受容」は，「外向性」にのみ有意傾向の影響を与えており，「信頼感」は，「外向性」にのみ有意な影響を与えていた。したがって，仮説２は，青年期のパーソナリティの「情緒不安定性」を除く４つの面で支持された。

以上の結果から，思春期に比べて児童期の友人関係の方が，青年期のパーソナリティに多面的な影響を与えていた。特に「外向性」と「開放性」には児童期の友人関係の全ての面が有意な影響を与えており，Big Five のうちでも，これらの次元におけるパーソナリティ形成に，児童期の友人関係が一定の役割を果たしていることが示唆された。「外向性」については，思春期の友人関係の影響も認められており，友人関係を経験する時期によらず，友人関係の影響を受けやすいパーソナリティの次元であることが推測される。「外向性」は社交性やコミュニケーションにかかわる次元であることから，受容的な友人との間で安心感をもって自然体で交流したり，信頼できる友人に悩みごとも開示しながら支えてもらったり，自分の人生が変わるほどの影響を与えてくれるような友人と出会ったりすることを通して，他者と関わることに安らぎや面白さを覚えて人への関心や人と関わる意欲を高めていくというプロセスが推測される。

4.3　仮説３「子どもの幼児期，児童期，思春期に認知された両親の夫婦関係の状態には，連続性がある」の検討

幼児期・児童期・思春期の子どもに認知された夫婦関係の良好さの間にどのような影響関係があるのかを明らかにするために，単回帰分析を行った。その結果，幼児期の夫婦関係は児童期の夫婦関係に，また，児童期の夫婦関係は思春期の夫婦関係にそれぞれ有意で強い影響を与えていた。幼児期の夫婦関係は，思春期の夫婦関係にも有意な影響を与えていたが，影響の大きさは相対的に小さかった。以上より，幼児期と児童期，児童期と思春期という隣接した時期間の夫婦関係の良好さの間に，それぞれ大きな影響関係が認められたことから，子どもが幼児期・児童期・思春期に認知していた夫婦関係には，強い連続性があると言える。しかし，幼児期と思春期の間の影響関係は相対的に弱いことから，夫婦関係の良好さは，長いスパンで見れば多少変化していくものであることも示唆された。本調査の結果は，夫婦関係の良好さが子どもの成長に伴い低下するという，一般的な方向性を示していた。以上を踏まえれば，仮説３は概ね支持されたが，夫婦関係の良好さは，長期的には明確に変化することも確認された。

本調査では，幼児期の両親の夫婦関係の良好さのみが青年期のパーソナリティの「調和性」に有意傾向の影響を与えており，児童期と思春期の夫婦関係の影響は認められなかった。幼児期・児童期・思春期の夫婦関係に強い連続性があるとすれば，幼児期の夫婦関係だけで影響が見られたのはなぜだろうか。Big Five における「調和性」の次元は，おおらかで協調的な性質を捉えている。子どもは最も身近な両親間の仲睦まじい関わりに日々接しながら，そのあり方を他者とのかかわりの見本として身につけていくものと考えられる。こうした調和的な性質

の習得は，パーソナリティの基礎を形成する時期であり，しかも，両親間の関係性が最も良好な幼児期にこそ，最も効果的なのかもしれない。

4.4　残された課題

本研究の調査では，幼児期から思春期にかけての両親の夫婦関係や友人関係について，回想法により回答を求めた。したがって，実際の幼児期，児童期，思春期の人間関係と調査の回答との間にはずれがある可能性がある。

また，本研究では，夫婦関係満足尺度と改訂版友人関係機能尺度を改変して用いた。いずれも原版は，青年期を対象に，現在の関係についての回答を求める尺度であるのに対して，本研究では，それらの項目を用いて，青年期以前の両親の夫婦関係や友人関係を，回想に基づいて回答するよう改変した。この方法では，特に幼児期や児童期の両親の夫婦関係や友人関係を測定する上で，妥当性が十分でなかった可能性があるだろう。

さらに，本研究では，Big Five 尺度を用いることで，両親の夫婦関係や友人関係が多面的なパーソナリティに与える影響について明らかにすることができた一方で，従来の研究で取り上げられてきた自尊感情や抑うつなど，精神的な健康の指標への影響を検討することは，臨床的に重要な意義を持っている。人生のそれぞれの時期におけるどのような人間関係がそうした指標に影響を与えるかについての検討も，引き続き今後の重要な研究テーマとなろう。

文献

阿部香澄・深田智・小島隆次・西崎友規子・末次雄介・岡夏樹　(2016).　母親の子育ての仕方が子どもの性格に与える影響—子育て支援システムの作成に向けて—　第 30 回人工知能学会全国大会論文集，1 - 3.

藤井和子・井上晶子・奥平洋子（1987）．母親の生活価値観・子育て観・養育態度に関する研究 (3)—養育態度と母親がみた子どもの性格特徴を中心として—　日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集，182 - 183.

数井みゆき・無藤隆・園田菜摘（1996）．子どもの発達と母子関係・夫婦関係—幼児を持つ家族について—　発達心理学研究，*7*, 31 - 40.

小泉智恵・北村俊則・瀬地山葉矢・菅原健介・菅原ますみ・詫摩紀子・八木下暁子（2002）．夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として—　教育心理学研究 , *50*, 129 - 140.

熊谷龍一・並川努・中根愛・野口裕之・谷伊織・脇田貴文（2012）．　Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討　心理学研究，*83*, 91 - 99.

諸井克英（1996）．家庭内労働の分担における衡平性の知覚　家族心理学研究，*10*，15-30.

中村伸一　(2018)．夫婦不和の子どもへの影響　心身医学，*58*, 320 - 325.

丹野宏昭　(2008). 大学生の内的適応に果たす友人関係機能　青年心理学研究，*20*，55-69.

付記

本稿は，第一著者の指導学生であった中尾彩乃さんが，令和 3 年度に京都女子大学発達教育学部児童学科に提出した卒業論文『幼少期からの両親の夫婦関係と友人関係が青年期のパーソナリティに与える影響』の内容をもとに，一部に再分析を加えてまとめたものです。